

## 学 習 6-PF7

## 時間についてのアナロジー

○磯村陸子・無藤 隆

(お茶の水女子大学人間文化研究科) (お茶の水女子大学)

## 問題と目的

時間や愛などの、いわゆる抽象概念に関する知識・理解の性質について、認知言語学 (Lakoff&Johnson, 1980; Johnson, 1987) では以下のような主張がなされている

- 1) 身体によって経験可能な対象に関する知識への、「たとえ」(アナロジー)を通じて知識が構造化されている。
- 2) このような知識間のアナロジーには、イメージスキーマ<sup>1)</sup>と呼ばれるレベルが介在している。

このような主張の妥当性は、語彙の意味や言語表現の分析などによる言語学的な研究においては検討されつつある。しかし、心理学的な観点から、この主張、特にイメージスキーマに関する主張を扱った研究はわずかである (e. g. Gibbs, 1992; 楠見1993)。

本研究では、抽象概念 (ここでは「時間」) について話す際にみられる言語表現・ジェスチャーの分析を通じて、上のような主張の妥当性を検討した。

## 方法

成人35名 (大学生、大学院生、社会人) に対し、以下のような項目について、個別にインタビューを行い、様子をビデオで撮影した。

(所要時間は一人 約10分。)

- Q 1) 時間という言葉をきいて連想するものは何ですか (5つ)?  
連想を説明してください
- Q 2) 時間とは何でしょうか (一般的)?  
子どもに時間を説明するとしたら
- Q 3) 時間の使い方について気を付けていることはありますか?
- Q 4) 時間の過ぎる早さは一定だと思えますか?

## 結果

全体を通じて、以下のような2つのタイプのアナロジーモデルがみられた。

- 軌道モデル  
時間は軌道を描き移動する物体もしくは、人が移動する軌道。

- 包含モデル

時間は人が所有し、支配する物体。

以下、これら2つのモデルとの関連で言語・ジェスチャーについての分析結果を述べる。

## 1. 言語表現についての分析

Q 1: どちらのモデルに基づいた連想項目もみられた。また軌道モデルは、人を視野に入れた連

想 (e. g. 追われる) よりも、時間そのものに関する連想 (e. g. 流れ) で多かった。

Q 2: 子どもへの説明を求めた場合にはより多く軌道モデルが用いられる傾向にあった。

Q 3・4: Q 3・Q 4の問いにはそれぞれ、包含モデル、軌道モデルに基づいた言語表現が用いられている。被験者は、問いの基づくモデルと一貫した表現を用いて答える傾向にあった (e. g. Q 3 → 「貴重なので、無駄のないように」)

## 2. ジェスチャーについての分析

回答中にみられたジェスチャーは、以下の3つのカテゴリに分けられた (TABLE 1)。1度でもジェスチャーのみられた被験者は30名 (85.7%)。

強調: それ自体は意味をもたない、発話内容の強調のためのもの

描写的: それ自体が意味をもちかつ、言語内容と直接対応するもの

アナロジー的: それ自体が意味をもちかつ、言語内容と比喩的に対応するもの

TABLE 1 ジェスチャーの分類(1)

カテゴリ	回数	割合%
強調	97	38.2
描写的	119	46.9
アナロジー的	38	15.0

上のカテゴリのうち、描写的、アナロジー的の2つから、時間のモデルとの対応で以下のような4つが抽出できた (TABLE 2)。

描写的 (軌道・包含): 軌道・包含モデルに基づいた言語表現と直接対応するもの。

アナロジー的 (軌道・包含): それ自体が軌道・包含モデルに基づいているもの。

TABLE 2 ジェスチャーの分類(2)

カテゴリ	回数	割合%
描写的 (軌道)	63	24.8
(包含)	16	6.3
アナロジー的 (軌道)	15	5.9
(包含)	13	5.1

## 考察

言語に関する分析の結果、時間のある側面ごとに特定のアナロジー的なモデルを被験者がもっていることが明らかになった。また、時間についてのアナロジーモデルがジェスチャーにも、時にはジェスチャーが言語と直接対応せずにあらわれることが明らかになった。この事実は、モデルが何らかの身体的なイメージを伴っていることを示しており、抽象概念についてのアナロジーとイメージスキーマの存在という認知言語学の主張を間接的に裏付けるものである。

<sup>1)</sup> イメージスキーマとは、ごく単純かつ基本的な空間関係についての表象である。イメージスキーマは、さまざまな身体的経験から抽出されることにより獲得される。